

第1章

子どもの保健



子どもの保健

ライフサイクルを考えるには受精，出産といった出来事（event）と子宮内生活や子宮外生活といった生活の過程（時期－phase，あるいはライフステージ）があること，そしてその出来事とライフステージの意味を理解する必要がある。

人は死をもって生涯を終わるが，生き物としては結婚（性交）という出来事で精子と卵子が出会い，受精を経て次の世代へと命をつなぐライフサイクルを形成するのである。

子どもの健康指標として乳児死亡の低下があり，わが国ではこれが現在世界でも最低である。また，わが国では子どもが健康であることを「元気である」というが，子どもが「元気である」ことについて社会的関心がいっそう高まることが望まれる。

1 子どもの保健とは

保健とは広辞苑によると「健康を保つこと」とある。したがって子どもの保健とは「子どもの健康を保つこと」だといえる。子どもに限らず健康を保つことはすべての人にとって重要なことであり、このために保健学という学問領域が大きく発展してきている。そこで保健学とは何かについて検討しておきたい。

保健学は、日本大百科全書（小学館）によると、「健康を守り高めるための学問ならびに実践体系をいう。その内容としては、人間を環境のなかで生活するものとして理解し、その生活要因としての環境の解明と、互いに交錯する両者の関連性を健康を守る観点から総合的に把握し、健康を守り高めるための生物的、社会的諸原則を解明することである。さらには、それらの知識に基づいていろいろな生活条件下にある人々に、より健康な生活をもたらすような方法を開発していくことでもある。このためには、きわめて広範で包括的な領域の知識や協力が必要であり、その範囲は臨床医学、基礎医学、心理学、社会学をはじめ、自然科学、人文科学にまで及ぶことになる。したがって、保健学のなかでの分科も多岐にわたっている。一例として東京大学医学部保健学科（医学部健康総合科学科、現在の講座構成はこの記載と大きく異なっている）の講座構成をみると、人類生態学、保健社会学、保健管理学、保健栄養学、疫学（えきがく）、母子保健学、成人保健学、精神衛生学、看護学となっている。また、保健学を活動対象別にみると、学校保健、産業保健、環境保健、歯科保健、保健経済、保健法学、国際保健といった多くの分野に分けられる。保健学とほぼ同じ範囲を占める、すなわち近い学問分野ないし活動としてあげられるものに公衆衛生がある。なお、保健と同義語として慣用的に衛生が用いられてきているが（たとえば母子保健と母子衛生は同義に用いられる）、近年は、健康増進だけでなく、さらに広い活動のニュアンスをもつ保健の語が、衛生にかわって使われることが多くなっている。：平山宗宏」としている。このことを前提として小児保健学を要約すれば、「子どもの健康を守り高



めるための学問ならびに実践体系をいう。」ということになる。

ここで改めて子どもの保健について考えてみると、「子どもの保健とは、子どもの保健学に基盤をおいて、子どもの健康を維持増進させるために具体的な対策を考え、実行すること」だといえる。この基本理念が「ヘルスプロモーション」であり、このことについては次の項において詳しく述べられているので、これを参照していただきたい。

子どもの健康を考える上で、まずヒトの成り立ちを考える必要がある。生物学的に言えば、子どもは生殖という活動（受精）の中で命を授かり、胎児期を経て出生という母子ともに人生での最大の難関をくぐり抜けて、この世に誕生する。そして子どもは成長し発達して、自分が誕生する契機になった生殖という活動の結果として次世代を残し、この次世代を養育し自立させた後、老齢期に達して死を迎えるのである。このことをヒトのライフサイクルといっている。

ライフサイクルは図1に示したように、eventとphaseという2つの事

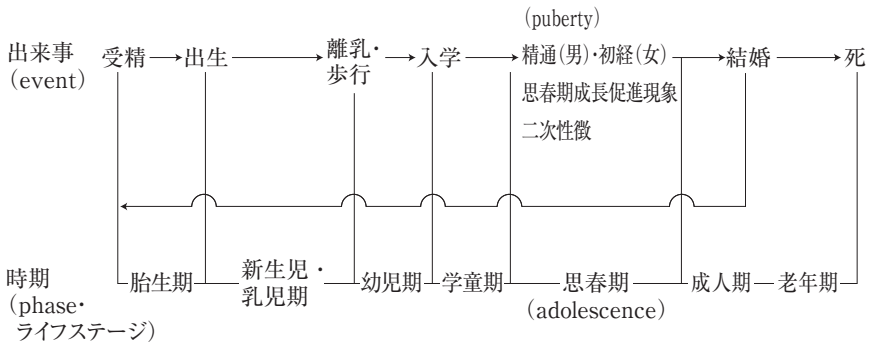


図1 人のライフサイクル

柄に基づいて、eventからみると受精，出生，離乳・歩行，入学，精通（男）・初経（女），結婚，死，phaseからみると胎生期，新生児期・乳児期，幼児期，学童期，思春期，成人期，老齢期に区分される。

子どもの保健はその視野を子どもの時期，すなわち受精から思春期の終わるまでに限るのではなく，ヒトのライフサイクル全体，言い換えればヒトの成り立ちのすべてを見通して考えなくてはならないのである。

これからの子どもたちが生活する環境は，子ども個人という観点に立てば，少子高齢化社会がもたらすさまざまな生活環境の問題を真剣に考えなくてはならないし，自然環境という観点に立てば，地球規模の温暖化や砂漠化，それに台風，大雨，洪水，地震，津波といった自然災害が大型化していることなどに対する対応が必要である。とくに後者の問題はもはや個人や日本という国家の問題ではなく，国際的観点からの対応が必要な段階に達している。

結論として，子どもの保健とは，ヘルスプロモーションの理念のもとに「子どもをヒトのライフサイクルのなかに的確に位置づけ，そして子どもが環境のなかで生活するものとして理解し，その生活要因としての環境の解明と，互いに交錯する両者の関連性を健康を守る観点から総合的に把握し，健康を守り高めるための生物的，社会的諸原則を解明し，それらのことを確実に実践すること」である。